文楽座命名一五〇年
二〇二二年十月 地方公演 配役表

昼の部

解説（あらすじを中心に）　豊竹亘太夫

花競四季寿より
楳茂都陸平＝振付
万歳
藤間紋寿郎＝振付
鷺娘

竹本小住太夫
豊竹亘太夫
豊竹薫太夫
鶴澤藤蔵
鶴澤友之助
鶴澤清允

（人形役割）

太夫	吉田清五郎
才蔵	吉田簑一郎
鷺娘	吉田簑紫郎

近松門左衛門＝作
冥途の飛脚
羽織落としの段

豊竹呂勢太夫
鶴澤清治

（人形役割）

亀屋忠兵衛	桐竹勘十郎

封印切の段

切　豊竹呂太夫
鶴澤清介

（人形役割）

花車	吉田勘市
遊女梅川	豊松清十郎
遊女千代歳	吉田簑太郎
遊女鳴渡瀬	桐竹勘次郎
禿	桐竹勘昇
丹波屋八右衛門	吉田玉輝
亀屋忠兵衛	桐竹勘十郎
太鼓持五兵衛	吉田玉延
仲居	大ぜい

囃子　望月太明藏社中

夜の部

解説（あらすじを中心に）　豊竹希太夫

団子売

お臼　竹本三輪太夫
杵造　竹本津國太夫
竹本聖太夫
鶴澤清馗
鶴澤寛太郎
鶴澤清方

（人形役割）

団子売杵造	吉田玉勢
団子売お臼	桐竹紋秀

菅原伝授手習鑑
寺入りの段

豊竹希太夫
鶴澤清公

寺子屋の段

切　竹本錣太夫
竹澤宗助
後　豊竹芳穂太夫
鶴澤清志郎

（人形役割）

菅秀才	豊松清之助
よだれくり	桐竹勘介
女房戸浪	桐竹勘壽
女房千代	吉田勘彌
小太郎	吉田玉峻
下男三助	吉田和馬
武部源蔵	吉田玉也
春藤玄蕃	吉田文哉
松王丸	吉田玉志
御台所	桐竹亀次
手習子	大ぜい
駕籠舁	大ぜい
百姓	大ぜい
捕手	大ぜい

囃子　望月太明藏社中

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。
◎開演中の写真撮影・録画録音ならびに携帯電話・スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。

観劇当日に発熱や風邪のような症状のある方、体調のすぐれないお客様はご無理なさらず、来場をお控えください。
観劇時は咳エチケットの励行ならびに、マスク着用・手指消毒（手洗い）の徹底などの感染症対策にご協力のほどお願い申し上げます。

花競四季寿より　万歳・鷺娘

文化6年（１８０９）、大坂の御霊社内の芝居で初演。春夏秋冬をテーマにした4つの舞踊からなる作品で、春の「万歳」と、冬の「鷺娘」をお届けいたします。

かつてお正月には欠かせない存在だった万歳―太夫と才蔵が、独特の雰囲気を漂わせてにぎやかに新春を寿ぎ、「鷺娘」では、白鷺の精が、降り積もる雪に耐えながらも、やがて来る春の兆しを見つけ、喜びます。

冥途の飛脚　羽織落としの段・封印切の段

竹本座で正徳元年（１７１１）7月以前に初演されたと推定される、近松門左衛門の上中下三巻の世話物。飛脚屋亀屋の養子忠兵衛が金を横領、遊女を請け出して逃亡した事件をもとにしています。

忠兵衛は、愛する遊女梅川を他の客に身請けさせまいとして、友人八右衛門宛に届いた金を、身請けの手付金に流用。八右衛門に事情を話し、謝罪しましたが、金はまだまだ足りません。

夜、急ぎの金３００両を届けるため、武家屋敷へと向かう忠兵衛。ところが、いつのまにか、足は梅川のいる方へ。梅川に会いたい…いや、金を届けなければ…迷いに迷い、行ったり来たり。とうとう、羽織が脱げ落ちたのにも気づかずに、遊廓へ。

そこで立ち聞きしたのは、八右衛門の話。金に詰まった忠兵衛の行く末を案じ、廓から遠ざけようとしてのこととはいえ、金の使い込みを暴露する、嘲罵にも似た言葉に、生来短気な忠兵衛は、逆上。梅川の嘆きも耳には入らず、金なら持っていると、３００両の封印を切って、金を八右衛門に投げつけ、梅川を身請けして逃走…。

忠兵衛が理性を失い破滅していくさま、人間の弱さ、愚かさをみごとに描いた近松の代表作の一つです。

団子売

江戸時代、臼と杵を持ち歩き、団子を作って売っていた団子売。一搗（つ）きごとに杵を振り、臼を叩いて、人集めをしたようで、その様子は、月の兎が団子を搗く、清元の歌舞伎舞踊『玉兎月影勝（たまうさぎつきのかげかつ）』（１８２０）に取り込まれました。これをもとに作られたのが、本作。若い夫婦が団子を搗き、踊りを披露するというもので、歌舞伎舞踊に逆輸入されています。

菅原伝授手習鑑　寺入りの段・寺子屋の段

平安時代、右大臣菅原道真は、左大臣藤原時平の讒言により、大宰府に左遷され、失意のうちに亡くなり、怨霊に。雷神として恐れられ、その後は学問の神様として慕われ、今日に至っています。本作は、さまざまな天神（道真）伝承を取り入れて、竹田出雲（初代）、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲（二代出雲）が合作し、人形浄瑠璃の黄金期、延享3年（１７４６）に竹本座で初演。浄瑠璃三大名作の一つに数えられる五段の時代物で、中でも最もよく上演される四段目をご覧いただきます。

道真の領内に住む百姓の三つ子の兄弟は、道真の計らいで、それぞれ、親王、時平、道真に舎人（とねり）として仕える身。時平の讒言で道真が失脚すると、時平を主人とする松王丸は、道真方の親兄弟と敵対。

時平が命を狙う道真の若君を我が子と偽り匿うのは、道真の書の高弟で寺子屋を営む武部源蔵。しかし、それも発覚。若君の首を討てと命じられ、進退きわまった源蔵は、やむなく、その日に入門したばかりの男の子を身代わりに。首の検分役は、若君の顔をよく知る松王丸。その目をごまかせる可能性はほとんどなく、討ち死覚悟で首を差し出す源蔵。と、意外にも、若君の首と松王丸が認め、うまくだませたと思いきや…。

松王丸は、道真に恩を受けながら敵対せざるを得ない立場に苦悩、若君を救って恩に報いようと、身代わりが必要となる源蔵のもとへ我が子を―それまで悪人と思われて来た松王丸の本心、子を失った悲痛な思いが明かされます。

江戸時代に何万と存在し、道真が祀られていた寺子屋を舞台として、腕白ざかりの子供たちが笑いを誘う冒頭から、松王丸夫婦の悲しみが胸に迫る、名曲として知られる段切の「いろは送り」まで、緊迫感みなぎる屈指の人気演目です。